

資料

看護教員としての能力と その自己評価に関する研究

Self-Evaluation of Educational Competence as Nursing Educators

小林 睦¹ 竹尾 恵子¹ 七田 恵子²

Mutsumi Kobayashi, Keiko Takeo, Keiko Shichita

キーワード：看護教育，看護教員，能力

Key words : Nursing Education, Nursing Educators, Competency

Abstract

This study aimed to clarify the competency of nursing educators and to explore a future direction for improving these competencies. Questionnaire surveys were administered to 219 nursing educators at 13 nursing educational institutions, all having consented to participate in the study. The results of the survey are as follows: 1) A significant number of educators regularly demonstrate ethical perspectives and human qualities in their teaching; 2) the most common competency that educators wished to acquire in the future was research competency; 3) regardless of differences in the institutions with which they were affiliated, all educators expressed a desire to further improve six competencies, including Educational Practice, Nursing Practice, Administration, Human Quality, Personal Growth (Ethical Values was not included); 4) educators teaching at universities tended to evaluate their competency more favorably than those working at professional schools and junior colleges; and 5) educators with more years of teaching experience had higher self-evaluations of their current educational competency. All nursing educators were enthusiastic about improving their overall educational competence.

要旨

本研究は、看護教員の教育能力を評価し、今後の看護教員の能力向上の方向性を知ることがを目的とした。看護基礎教育機関13校の219人の看護教員を対象に、質問紙調査(教育能力：7要素31項目)を行った。その結果、1)看護教員が現在大いに発揮している能力は、「倫理観」「人間性」であった。2)看護教員が今後身につけたい能力は、「研究能力」が最も高かった。3)看護教員は、「倫理観」を除き、今後、6つの教育能力(教育実践能力、看護実践能力、研究能力、管理能力、個人の成長、人間性)をさらに向上させたいとしていた。4)大学所属の看護教員は、専門学校・短大所属の看護教員に比べて、教育能力を高く自己評価していた。5)教育経験年数が長くなるほど、現在の教育能力については自己評価が高かった。教育能力全般について、全ての看護教員が能力向上への意欲が高かった。

受付日2014年10月3日 受理日2015年2月10日

*1 佐久大学看護学部 Saku University School of Nursing

*2 佐久大学看護学部 名誉教授 Saku University School of Nursing Professor emeritus

I. はじめに

医療ならびに看護を取り巻く環境は急速に変化し、質の高い看護師の養成が求められている。看護教育は、それに携わる人材の資質によって大きく左右される(小山, 2001)という。しかし、日本看護協会調査研究室(1993)から実際の看護教育の現場は、学生数の多さ、業務多忙、仕事量の過重が報告された。また、看護教員が辞めたいという思いや、ゆきづまり感を抱きながら看護教育を実践しているという(佐藤, 2010)。そのような中、2010年に厚生労働省から出された、今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書では「看護教員には看護実践能力と教育実践能力のどちらも必要であり、そのバランスが重要である」と指摘されている。

看護教員の能力に関する先行研究では、看護教員に必要な様々な能力が明らかになり(江崎, 1994)、能力の内容や向上への取り組み、能力の形成の契機、教員の教育や研修内容に関する研究が大半を占めている。本研究ではこれらの能力の中で、看護教員が重要と考え現在発揮している教育能力と、今後身につけたいと考えている教育能力を明らかにし、今後の能力向上に向けた示唆を得たいと考えた。

II. 用語の定義

能力：看護教員が教育活動の中で発揮している知識・技術・行動及び自らに備わっていると思える資質とする。

III. 研究目的

看護教員が教育上重要と考え、現在発揮していると思える教育能力の程度をどのように自己評価しているか。また、今後身につけたいと考える教育能力は何かを明らかにし、属

性(所属・臨床経験・教員経験)との関連を比較検討して、今後の看護教員の能力向上に向けた具体的示唆を得る。

IV. 研究方法

1. 調査対象・調査期間

A県内の看護基礎教育機関16校のうち、施設代表者に研究協力が得られた13校(看護系大学3校、看護系短大2校、看護師養成所8校)の看護教員219人とした。

調査期間は平成25年3月より同年4月であった。

2. データ収集方法

郵送法による自記式質問紙の配布と回収をおこなった。各施設代表者に協力の可否を尋ね、同意の得られた学校へ教員数の質問紙を郵送した。回収は同封した返信用封筒により、看護教員各自が個別返送によって行った。

3. 調査方法

米国のChoudhry, U.K(1992)の先行研究において、看護教員を対象に開発された教育能力の構成要素「教育実践能力」「看護実践能力」「研究能力」「管理能力」「個人の成長」を基盤とし、更に、現在の看護教育の実状に合わせ、「倫理観」、「人間性」の2つの要素を追加した。

日本看護協会から「看護者の倫理綱領」が1988年に策定され、2004年には文部科学省より「看護実践能力の充実に向けた大学卒業時の到達目標」に、倫理に関する教育方法と評価が具体的に示された。2007年には厚生労働省から看護師教育課程に「看護師として倫理的な判断をするための基礎的能力を養う」という内容が加えられ「看護倫理」が充実にすべき教育内容として明示された。これを受けて本調査の教育能力の構成要素に「倫理観」を追加した。また「人間性」については、教育

は教師と学生との相互信頼関係のうえに成立するものであり、教師の人間性が問われる(大下, 1996)のものであり、今回教育能力の構成要素に追加した。

以上7つの教育能力を構成要素とし、31項目(各構成要素内の細目)からなる質問紙を(資料1)作成した。大学所属教員4名と専門学校所属教員4名に予備調査を実施後、質問項目の表現を修正し完成した。なお、質問項目(細目)の作成にあたっては、①内容を正しく表現し、理解しやすいものとし②具体的かつ単一な質問内容になるように配慮した。

各質問項目についての能力レベルは、『現在発揮していると思う能力の度合い』(質問紙1)について「4: 大いに発揮している」「3: 中等度発揮している」「2: 少し発揮している」「1: 発揮していない」の4段階とした。『今後身につけたい能力の度合い』(質問紙2)については「4: 大いに必要」「3: 中等度必要」「2: 少し必要」「1: 必要ない」の4段階とし、いずれもリッカート法によって尺度化し、スコアが高いほど「能力を発揮している」或は「能力を必要としている」となるように配点した。

4. 分析方法

分析には、統計解析 SPSS21.0 J for Windows 版を使用し、①質問紙の項目のクロンバック α 係数②7つの教育能力毎の記述統計量の算出と平均値の差の検定(t検定)③属性ごとの一元配置分散分析を行った。有意確率は $p < 0.05$ とした。

5. 研究対象者への倫理的配慮

調査の依頼にあたっては、まず施設代表者に了解を得たうえで質問紙の配布を行った。研究目的・方法・不利益が生じないことを説明した調査依頼文書を質問紙に同封した。また、研究への協力は自由意思であり、無記名式で学校・個人が特定されないこと、調査結

果を公表することを明記した。質問紙の回収をもって同意が得られたものとした。本研究は佐久大学研究倫理委員会の承認を得ている。(倫理審査結果通知番号第12-0006号)

V. 結果

1. 質問紙の回収率等

対象者219人に配布し、回収数は106人(回収率48.4%)であった。所属別の回収数は大学54人/114人(47.4%)、短大6人/14人(42.9%)、専門学校46人/91人(50.5%)であった。無回答の項目については欠損値として扱い分析した。

質問紙の7構成要素毎の項目の内部一貫性に関して、クロンバック α 係数は0.752~0.909であった。各要素の項目(細目)の内部一貫性は得られたものとした。

2. 対象者の属性(表1)

1) 年齢

30~39歳は27人、40~49歳は31人、50~59歳は30人と、この3区分の年齢層で全体の83%(88人)を占めていた。残り12%は25~29歳が5人、60歳以上が12人、無回答が1人であった。

2) 対象者の所属機関

106人中54人(50.9%)と対象者の約半数が大学所属教員であり、次いで、専門学校所属教員が46人(43.4%)となった。短大所属教員は6人(5.7%)であった。

3) 対象者の教育歴

最も多かったのは大学院(修士)の40人(37.7%)であり、次いで専門学校38人(35.8%)であった。次いで比率はかなり低くなるが、大学14人(13.2%)、大学院(博士)10人(9.5%)短大4人(3.8%)であった。

4) 対象者の教育経験・臨床経験年数(表2)

教育経験年数で最も多い者は5年以内の36人(34.0%)、次いで6~10年が29人(27.4%)、

11～15年の19人(17.9%)であった。20年以上の者は10名であった。

臨床経験年数を見ると、最も多いのは6～10年の31人(29.2%)、次いで11～15年の27人(25.5%)、16～20年が18人(17.0%)であった。20年以上の者は、11名であった。

表1 調査対象者の背景 N=106

項目	区分	人数(%)
年齢	25～29歳	5(4.7)
	30～39歳	27(25.5)
	40～49歳	31(29.2)
	50～59歳	30(28.3)
	60歳以上	12(11.3)
	無回答	1(1.0)
所属	専門学校	46(43.4)
	短大	6(5.7)
	大学	54(50.9)
教育歴	専門学校	38(35.8)
	短大	4(3.8)
	大学	14(13.2)
	大学院(修士)	40(37.7)
	大学院(博士)	10(9.5)

表2 教育・臨床経験年数 N=106

区	教育経験年数(%)	臨床経験年数(%)
5年	36(34.0)	17(16.0)
6～10年	29(27.4)	31(29.2)
11～15年	19(17.9)	27(25.5)
16～20年	10(9.4)	18(17.0)
21～25年	3(2.8)	6(5.7)
26～30年	3(2.8)	3(2.8)
30年以上	4(3.8)	2(1.9)
無回答	2(1.9)	2(1.9)

3. 教育能力の7構成要素の分析

1) 看護教員の『現在発揮している能力』について(表3)

教育能力を構成する7つの要素間の有意差を見ると、「倫理観」(Mean=3.22, SD=0.58)は他のすべての構成要素より有意に平均値が高かった($p<0.01$)。「人間性」(Mean=2.9, SD=0.67)は「教育実践能力」より有意に高く($p<0.05$)、また、「研究能力」(Mean=2.3, SD=0.81)は、「倫理観」「人間性」「看護実践

能力」「管理能力」「個人の成長」より有意に平均値が低かったが($p<0.01$)、「教育実践能力」との間に有意差はなかった。

2) 看護教員の『今後身につけたい能力』について(表4)

教育能力を構成する7つの要素間の平均値を見ると、平均値が最も高かったのは「研究能力」(Mean=3.52, SD=0.63)であり、次いで「教育実践能力」(Mean=3.43, SD=0.56)、「人間性」(Mean=3.41, SD=0.74)と低くなっている。「研究能力」は「管理能力」(Mean=3.16, SD=0.73)より有意に平均値が高かった($p<0.01$)。

3) 『現在発揮している能力』と『今後身につけたい能力』の比較(表5)

教育能力を構成する7つの要素のいずれにおいても、「倫理観」を除き『現在発揮している能力』に比して、『今後身につけたい能力』の平均値は、有意に高かった($p<0.01$)。中でも変化が大きかったのは「教育実践能力」(Mean=18.19, SD=4.84)から(Mean=23.94, SD=3.89)へ、「看護実践能力」(Mean=16.91, SD=3.72)から(Mean=20.12, SD=3.55)へ、「研究能力」(Mean=6.92, SD=2.42)から(Mean=10.55, SD=1.88)であった。「倫理観」においては、『現在発揮している能力』と『今後身につけたい能力』との間に有意差はなかった。

4) 所属別にみた教育能力の比較(表6.7)

『現在発揮している能力』について見ると、「研究能力」において、大学所属教員(Mean=7.74, SD=2.50)のほうが専門学校所属教員(Mean=5.87, SD=1.98)に比して、有意に高かった($p<0.01$)。「個人の成長」では、短大所属教員(Mean=8.83, SD=0.41)が専門学校所属教員(Mean=7.61, SD=2.13)より有意に高かった($p<0.01$)。

『今後身につけたい能力』について見ると、「管理能力」において、大学所属教員(Mean=20.33, SD=3.93)の方が専門学校所属教員

表 3 看護教員の『現在発揮している能力』の能力間比較

構成要素	倫理観	人間性	看護実践能力	管理能力	個人の成長	教育実践能力	研究能力
Mean(SD)	3.22(0.58)	2.90(0.67)	2.82(0.62)	2.76(0.72)	2.69(0.71)	2.60(0.69)	2.30(0.81)

一元配置分散分析 (F=17.58, p<0.01) Tukey 検定 *p<0.05, **p<0.01

表 4 看護教員の『今後身につけたい能力』の能力間比較

構成要素	研究能力	教育実践能力	人間性	看護実践能力	個人の成長	倫理観	管理能力
Mean(SD)	3.52(0.63)	3.43(0.56)	3.41(0.74)	3.35(0.59)	3.31(0.71)	3.24(0.80)	3.16(0.73)

一元配置分散分析 (F=3.20, p<0.01) Tukey 検定 **p<0.01

表 5 『現在発揮している能力』と『今後身につけたい能力』の比較

構成要素	範囲 (Min-Max)	現在発揮している	今後身につけたい	t 検定 p
		教育能力 Mean(SD)	教育能力 Mean(SD)	
教育実践能力 (N=106)	7-28	18.19(4.84)	23.94(3.89)	**
看護実践能力 (N=106)	6-24	16.91(3.72)	20.12(3.55)	**
研究能力 (N=106)	3-12	6.92(2.42)	10.55(1.88)	**
管理能力 (N=106)	6-24	16.58(4.34)	18.97(4.35)	**
個人の成長 (N=105)	3-12	8.07(2.15)	9.94(2.14)	**
倫理観 (N=106)	4-16	12.89(2.31)	12.95(3.21)	ns
人間性 (N=106)	2-8	5.79(1.34)	6.81(1.49)	**

**p<0.01, ns: not significant

表 6 所属別にみた教育能力の比較

『現在発揮している能力』

構成要素	専門学校	短大	大学	F 値
	n=46 Mean(SD)	n=6 Mean(SD)	n=53 Mean(SD)	
教育実践能力	18.46(3.91)	18.33(2.58)	17.94(5.73)	0.14
看護実践能力	16.8(3.04)	15.83(1.72)	17.11(4.37)	0.34
研究能力	5.87(1.98)	7.5(1.87)	7.74(2.50)	8.71
管理能力	17.04(4.07)	16.5(2.81)	16.2(4.72)	0.46
個人の成長	7.61(2.13)	8.83(0.41)	8.37(2.20)	2.02
倫理観	12.98(2.39)	12.67(2.07)	12.83(2.30)	0.08
人間性	5.87(1.29)	6.17(0.98)	5.69(1.41)	0.48

一元配置分散分析 Tukey 検定 **p<0.01

表7 所属別にみた教育能力の比較
『今後身につけたい能力』

構成要素	専門学校	短大	大学	F 値
	n=46 Mean(SD)	n=6 Mean(SD)	n=53 Mean(SD)	
教育実践能力	23.39(4.02)	21.0 (2.97)	24.75(3.67)	3.49
看護実践能力	19.59(3.40)	17.67(2.94)	20.85(3.58)	3.23
研究能力	10.26(1.91)	10.0 (1.67)	10.85(1.86)	1.51
管理能力	17.8 (4.30)	15.67(4.63)	20.33(3.93)	6.69
個人の成長	9.87(1.87)	8.17(1.84)	10.21(2.32)	2.57
倫理観	12.33(3.18)	9.33(3.33)	13.89(2.83)	7.93
Ⅶ人間性	6.52(1.52)	5.33(2.07)	7.22(1.24)	6.52

一元配置分散分析 Tukey 検定 *p<0.05, **p<0.01

表8 教員経験年数別にみた教育能力の比較『現在発揮しているの能力』

要素項目/教員経験年数	5年以下(n=36)	6~10年(n=29)	11~15年(n=18)	16~20年(n=10)	20年以上(n=10)	F 値
教育実践能力	2.2 (0.64)	2.59(0.62)	2.93(0.58)	2.77(0.67)	3.24(0.53)	7.89
看護実践能力	2.58(0.58)	2.82(0.61)	2.96(0.56)	2.78(0.70)	3.27(0.53)	3.11
研究能力	1.85(0.61)	2.4 (0.82)	2.37(0.68)	2.63(0.87)	3.3 (0.51)	9.4
管理能力	2.41(0.67)	2.78(0.74)	3.01(0.64)	2.82(0.70)	3.42(0.42)	5.54
個人の成長	2.42(0.67)	2.74(0.81)	2.75(0.61)	2.77(0.63)	3.33(0.47)	3.77
倫理観	3.03(0.59)	3.13(0.58)	3.29(0.52)	3.4 (0.49)	3.75(0.29)	4.05
人間性	2.51(0.63)	3.05(0.72)	3.08(0.42)	2.95(0.44)	3.2 (0.63)	5.04

一元配置分散分析 Tukey 検定 *p<0.05, **p<0.01

(Mean = 17.8, SD = 4.30)、短大所属教員 (Mean = 15.67, SD = 4.63) に比して、有意に平均値が高かった(p<0.05)。「倫理観」、「人間性」においても同様に大学所属教員が短大、専門学校教員より有意に平均値が高かった。

5) 教員経験年数別にみた教育能力の比較 (表8)

『現在発揮している能力』についてみると、「研究能力」において、5年以下の教育経験年数者 (Mean = 1.85, SD = 0.61) は、教育経験年

数が、6~10年 (Mean = 2.40, SD = 0.82)、16~20年 (Mean = 2.63, SD = 0.87)、20年以上 (Mean = 3.30, SD = 0.51) の者より平均値は有意に低かった。20年以上の教育経験年数者は平均値が最も高かった。

「教育実践能力」についてみると、5年以下の教育経験年数者 (Mean = 2.20, SD = 0.64) は、年数が11~15年 (Mean = 2.9, SD = 0.58)、20年以上の者 (Mean = 3.24, SD = 0.53) に比して平均値は有意に低かった(p<0.01)。「倫理観」

においても、5年以下 (Mean = 3.03, SD = 0.59) 及び 6~10年 (Mean = 3.13, SD = 0.58) の教育経験年数者は、20年以上の教育経験年数者 (Mean = 3.75, SD = 0.29) に比して平均値は有意に低かった ($p < 0.01$)。

『今後身につけたい能力』では、教育能力の7つの要素のいずれにおいても、教育経験年数による有意差はなかった。

6) 臨床経験年数別にみた教育能力の比較

『現在発揮している能力』と『今後身につけたい能力』ともに、全ての教育能力で臨床経験年数による有意差はなかった。

VI. 考察

1. 看護教員が現在発揮している能力

今回の調査で、現在大いに発揮している能力を見ると、「倫理観」が最も高かった。「倫理観」については、所属機関に関わらずすべての看護教員が高く自己評価している。平成22年度日本看護系大学協議会FD委員会調査報告(林ら, 2011)でも、教員の向上すべき資質として人間性と倫理観は全ての職位において自己評価が高い結果となっており、今回も同様の結果となった。

高度医療技術の適用や権利意識の向上、保健医療に対する人々の考え方や対応の変化が看護教育にも波及し(稲葉, 2001)、看護教育における倫理教育の重要性が認識され、看護教員が教育の場においても倫理的対応の必要性を十分意識して、「倫理観」に関わる能力を発揮しているものと思われる。

次に高かった「人間性」については、先行研究でも、「教師としての人間性」については、校種を問わず共通して大事な資質であるとのべられている(横川, 1998)。看護教員が学生に対して一番の理解者である役割は大きく、また、ありのままの学生を受け止め、目指す看護師像へと導くため、根気強い教育者として、その人間性が重要になる。看護教員の態

度や看護観は学生にとって身近なモデルとして存在し、学習成果に大きな影響を与えるであろう。このような影響、効果を考えるとき、看護教員にとっての「人間性」は、能力として極めて重要である。

本調査における「倫理観」「人間性」が現在発揮している能力として高く自己評価していたことは、現代の医療状況の変化に看護教員が呼応し、学生に適切に対応している結果と考えられる。

2. 看護教員が今後身につけたい能力

今後身につけたい能力として、「研究能力」は最も高かった。逆に、現在発揮している能力として、研究能力は最も低かった。この事は看護教員が自己の研究能力に不足を強く感じ、改善を意識して、今後に向けての努力目標としているものと言える。「研究能力」を所属別に見てみると、大学所属教員は専門学校所属教員に比べ有意に高く評価している。また、今後身につけたい能力においては、「研究能力」は、所属機関別に有意の差はなく、ほぼ同じ平均値を示していた。この事は、いずれの教育機関に所属していても「研究能力」の向上を求めている。専門学校に所属する看護教員が、現在、「研究能力」の不足をより実感しており、今後、研究能力の習得の必要性を強く感じているものといえる。

舟島ら(1994)が行った1989年から1993年の看護学教育研究の動向の5年間の結果では、看護教員(研究者)数は専門学校が256名(24.8%)、大学が188名(18.2%)、短大が417名(40.4%)とある。しかし、看護基礎教育機関数の比率から見ると大学や短大の看護教員数のほうが、対学生比で見れば多い状況である。また、経年的にみても大学所属の看護教員数が増加してきている。更に、専門学校の看護教員は仕事の過重や研究時間の少なさ、研究費がないなど、研究活動が困難な状況もあり、これらのことが今回調査の「研究能力」の低さ

に現れているのかもしれない。研究活動の積み重ねが結果的に看護の質を高めることを看護教員が認識し、今後身につけたい能力に「研究能力」を挙げているものと思える。

3. 所属別にみた看護教員の能力評価

教育能力を構成する7つの要素における、『今後身につけたい能力』の所属教育機関別(大学・短大・専門学校)の違いを見ると、「管理能力」において、専門学校所属教員、短大所属教員より大学所属教員の方が平均値は有意に高く、また、「倫理観」、「人間性」においても、大学所属教員は平均値が有意に高かった。すなわち大学所属教員は、「研究能力」の将来目標については、他機関所属教員と差異がないものの、「管理能力」「倫理観」「人間性」においては、将来習得したい能力としてより高い目標を示していると言える。

小山ら(2001)が行った調査研究でも、学校所属別では看護教員に期待する能力は大学の方が専門学校より上回っていた。専門学校の看護教員が職業訓練的なものを主目的と考え、大学での看護教育が高等教育の中で専門性を身につけていくという、教育目標の違いがこのような差を生むのかもしれない。

何れにしても、全ての看護教員は、教員としての能力を高め、高い能力を持って看護教育ができるように、様々な方法で研鑽する機会が必要であろう、そのような道が準備される事が望まれる。

4. 教育経験年数にみた看護教員の能力評価

教員経験年数が長いほど現在発揮している能力の評価は高かった。教員経験の長さが教員の能力の自己評価を高めるという結果は、友國(1998)が行った研究の、教員経験年数の増加にしたがって、教育指導の自信が高まるという報告と一致している。

教育経験は、教育実践・研究活動・研修会等の機会、あるいは仕事上の役割などを通じ

て、能力についての自信を高めていくものと考えられる。教員経験を通じて同僚性を築き、組織の中でのキャリアアップの取り組みも大切になると考える。

VII. 結論

1. 看護教員が『現在大いに発揮している能力』は、「倫理観」「人間性」であった。
2. 看護教員が『今後身につけたい能力』は、「研究能力」が最も高かった。
3. 看護教員は、「倫理観」を除き、6つの教育能力(教育実践能力、看護実践能力、研究能力、管理能力、個人の成長、人間性)をさらに向上させたいと考えていた。
4. 大学所属の看護教員は、専門学校・短大所属の看護教員に比べて、教育能力を高く自己評価していた。
5. 教育経験年数が長くなるほど、現在の教育能力について自己評価が高かった。

VIII. 本研究の今後の課題

今後、対象を拡大し、調査を重ねて、教員の教育能力の7構成要素並びに、要素ごとの項目(細目)について、検討を重ね、質問紙の内容妥当性を高めていきたいと考えている。

謝辞

ご多用のなか調査にご協力くださいました看護教員の皆様に心より感謝致します。

なお、本研究は佐久大学大学院看護学研究科看護学専攻修士課程で提出した修士論文に一部加筆・修正を加えたものである。

文献

Choudhry, U.K(1992). New Nurse Faculty- Core Competencies for Role Development.

- Journal of Nursing Education, 31(6), 265-272.
- 江崎フサ子(1994). 看護教員の能力・資質の傾向—能力・資質の自己診断の分析を通して—. 九州教育学会研究紀要, 22, 171-178.
- 大学基準協会, 21世紀の看護学教育—基準の設置に向けて— 2014/1/10, http://www.juaa.or.jp/images/publication/pdf/21_century_nurse.pdf
- 舟島なをみ, 安齋由貴子, 中谷啓子(1994). 過去5年間の看護学教育研究の動向と今後の課題. 看護教育, 35(5), 392-397.
- 林優子, 山口桂子, 正木治恵(2011). 看護学の将来を担う次世代のためのFDのあり方. 日本看護科学学会誌, 31(2), 97-100.
- 稲葉佳江(2001). 看護倫理教育の課題とその内容構成の試み. 教授学の探究18, 145-161.
- 小玉香津子(1993). 日本看護科学学会誌にみる研究の動向—第12回学術集会シンポジウム「看護における研究の方向」から—. 日本看護科学学会誌, 13(1), 28-31.
- 厚生労働省(2007). 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書, 2014/1/10, <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/s0420-13.html>
- 厚生労働省(2010). 今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書, 2013/6/5, <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/02/s0217-7.html>
- 小山真理子, 大串靖子, 小田正枝, 浅川明子, 田村やよい, 西村千代子, 他(2001). 看護教師の資質の発展に関する研究その2看護教育機関調査. 日本看護学教育学会誌, 10(4), 49-91.
- 文部科学省(2004). 看護実践能力の充実に向けた大学卒業時の到達目標, 2014/2/18, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018-15/toushin/04032601.htm
- 日本看護協会調査研究室(1993). 日本看護協会調査報告38看護教育調査, 2013/6/5, 86-123. <http://www.nurse.or.jp/home/publication/seisaku/pdf/38-008.pdf>
- 大下静香, 佐藤みつ子(1996). 現代の変化する社会における看護教師に必要な諸能力に関する研究—看護教員養成修了者の調査を通して—. 広島県立福祉短大紀要, 2(1), 1-9.
- 齋藤茂子(2009). 新カリキュラムで臨地実習をどう見直すか. 看護展望, 34(2), 6-18.
- 佐藤道子(2010). 看護教師の「辞めたい・ゆきづまり感」に関する調査. 看護教育, 51(11), 945-947.
- 白水真理子(2003). 看護教育研究-研究動向と課題, 小山真理子(編), 看護教育の原理と歴史. 181-208, 東京: 医学書院.
- 戸田肇(2009). 現代の若者気質と看護教育. 看護, 61(4), 72-80.
- 友國一子(1998). 看護教員の自己成長に対する意識—成長の特徴と影響要因, 看護研究学会誌, 21(3), 179.
- 横川和章, 古川雅文, 浅川潔司, 長瀬久明, 成田滋, 鈴木正敏, 他(1998). 教師に必要な資質能力に関する研究(2). 兵庫教育大学研究紀要, 19, 183-188.

資料1 質問紙1

以下の項目について、看護教員として現在あなたが発揮していると思う能力の度合いについて当てはまる番号に○をつけてください。

	質問項目	大いに発揮している	中等度発揮している	少し発揮している	発揮していない	構成要素	Cronbach's α 係数
1	教育に関する幅広い知識	4	3	2	1	教育実践能力	0.909
2	学生の成長を促進する力	4	3	2	1		
3	学生の看護実践力を促進する力	4	3	2	1		
4	学生の学修を評価する力	4	3	2	1		
5	学生の権利を擁護し、助言者としての力	4	3	2	1		
6	適切なカリキュラムを開発し作成する力	4	3	2	1		
7	クラスを運営する力	4	3	2	1		
8	専門分野における最新の医療・看護に関する知識	4	3	2	1		
9	理論に基づいて看護実践を行う技術力	4	3	2	1		
10	看護過程に関する指導力	4	3	2	1		
11	医療現場で看護実践して見せる力	4	3	2	1		
12	学生に実習場を解説し理論化する力	4	3	2	1		
13	看護の対象者とコミュニケーションをとる力	4	3	2	1	研究能力	0.905
14	研究に取り組む力	4	3	2	1		
15	論文をクリティークする力	4	3	2	1		
16	論文を教育や看護実践に活用できる力	4	3	2	1		
17	学生との人間関係を築く力	4	3	2	1		
18	実習施設と連絡調整ができる力	4	3	2	1		
19	他領域の看護教員と協働できる力	4	3	2	1		
20	看護教員として地域社会と連携をとる力	4	3	2	1		
21	学校運営に主体的に参画する力	4	3	2	1	個人の成長	0.842
22	リーダーシップをとる力	4	3	2	1		
23	学会や研修に参加する力	4	3	2	1		
24	自己能力を高めキャリア発展に取り組む力	4	3	2	1		
25	自己の看護及び教育実践を振り返り、修正できる力	4	3	2	1		
26	全ての学生に、平等・公平に接する力	4	3	2	1		
27	看護の対象となる人間の尊厳・権利を尊重する力	4	3	2	1		
28	看護の対象者の安全安楽を保障する力	4	3	2	1	人間性	0.752
29	自己評価及び他者からの意見を参考にできる力	4	3	2	1		
30	学生を理解する力	4	3	2	1		
31	学生の目標となる態度、行動がとれる力	4	3	2	1		

*質問紙2の項目も同様の内容で作成した。